

漢法苞徳塾資料	No. 144
区分	治療論
タイトル	鍼灸治療における臨床の流れ
著者	八木素萌
作成日	1994.08.28

ステップ 1

三因の弁別

病因の弁別

- ・外感病
- ・内傷病
- ・不内外因

五邪の弁別

五邪は

風	熱、暑	湿、労、食	燥	寒冷
木邪	火邪	土邪	金邪	水邪

のように五種類に把らえられており、上図のような五行性が見られており、五臓（広義の）の帯びている五行性に相応した親和性を見せる。

つまり、

- 肺（金性）→（金性の邪＝燥邪）が入りやすい、
- 心（火性）→（火性の邪＝熱、暑）が入りやすい、
- 脾（土性）→（土性の邪＝湿、労、食）が入りやすい、
- 肝（木性）→（木性の邪＝風）が入りやすい、
- 腎（水性）→（水性の邪＝寒冷、氷冷）が入りやすい。

そして邪が人身を冒すと、五臓の反応が表現される部位に現われる

八虚（肘・胸脇・股関節前面〈髀枢〉・膝裏）にも、臍にも、募穴にも、要穴にも、背腧にも、尺皮にも、また、『素問』金匱真言論第4の次の記述に見られる部位

木	風	肝	頸項	春気者病在頭
火	熱	心	胸脇	夏気者病在臑
土	湿	脾	脊	
金	燥〈西風〉	肺	肩背	秋気者病在肩背
水	北風〈寒冷〉	腎	腰股	冬気者病在四肢

『素問』には他の編にも五邪が入客しやすい部位に関する記述が見られる

ステップ 2

病因の五行

- ・外感病……木（風）・火（熱、暑）・土（湿、勞、食）・金（燥）・水（濡寒）
- ・内傷病……内因の五行を弁別するのみでは不足である。故に微弱な外因要因の把握と
病理的産生物の把握が必要
- ・不内外……房勞・飲食・怠惰の診別の他は、傷害部位に領野を持つ経脈と傷害の種別の把握

注 イ．金邪は「天または上から主に肺を犯し衛気を外塞しやすい寒さ」または
「乾燥した空気は気管の蠕毛の氈動を停滞させる」邪である。
塾では「涼」と表現する場合もある。肺に親和的

ロ．水邪は腎に親和的な邪で、「地面から、あるいは、足から、下から陰（骨、体液、深部、陰側）を犯す湿っぽい寒冷さ」の邪である。「冰冷」と表現する場合もある

ハ．病因の五行は、人身の生理・病理現象を介して現われる。
つまり「木」邪は「木」臓（木性に配当されている人身の全身的な各種の部位機能）に親和的であり、「水」邪は「水」臓に…と言う具合である。

ステップ 3

病の性質と現段階や趨勢の把握

- ・問診・聞診によったり、切診・望診（蒙色も含む）など、各種の診察方法や診察
- ・手技を駆使して判断する。

悪化の場合の傾向趨勢

- ・外感病の場合は、表陽の部から裏や半表半裏、そして陰へ
- ・内傷病の場合は、上部の臓から次第に下部の臓へ（肺→…腎）、あるいは、
下部の臓から次第に上部の臓へ（腎→肺）と言う変化。
また、陰の序列（太陰→少陰→厥陰）に従う変化。
- ・病臓と病邪の五行的な位置関係――正邪・実邪・虚邪・微邪・賊邪
- ・病臓と運氣の位置関係――季節の五行の盛衰の循環の位置と、病臓の五行との関係
- ・病の発展と、衰退から治癒へ、と言う変化過程の、どの辺りに位置していると解される
かの問題

病の性質

- ・寒・熱・燥・湿――治法の選択や配穴の原理の選択が出来る
- ・変化の劇易・緩急――予後の判断。
- ・陰陽は五行的把握があれば決まってくる・表裏は病位把握から決まってくる。

（三陰三陽）の問題であったり、（三焦の上中下）の問題であったり、経脈の問題であったり、臓腑の関係の問題であったり、五臓の五行性に自動的に規定されていたり、など等種々の局面があって、今日の「中医学」の用語は、語を用いる場合に、その使用法の座標が移動しやすい傾向が見られ、その座標移動には、規則性が不足して見える。そのような点は、語の用い方として現代性に欠けるので、努めて「座標の移動」が規則性を帯びるように注意したい。

注 イ．五臓の陰陽と、病や病因の陰陽には、語が表現している内容には明らかに「ズレ」がある。

ロ．表裏概念と三陰三陽概念、臨床で用いる場合には、病位表現概念であることが一般的である。表＝太陽・裏＝陽明・半表半裏＝少陰である。また、三陰は、太陰・少陰・厥陰であり、それらの何れに病があるかについての、認識に従って呼ばれる。

ハ．病位論としての「三焦」概念は、『温病論』成立後のものであるから、これに従う。元来、この概念は「湿熱病」「伏暑感冒」の診察と治療に関連して、「三陰三陽」病位論に不足感が生じたことに応じて提起されたものである。ゆえに、「水滯留」や「気の耗散」そして「潮熱」の状態に、主として用いる。また、「衛・気・榮・血」の概念ともオーバーラップする側面もあるので、これも視野に入れて考察することが、必要かつ適当である。

ステップ 4

病の大過・不及の判断と質の強弱・生まれつき・抵抗力・病気に対するスタンスの判断などこれらによって、施術の基本的な手法を決めることが出来る。つまり、補瀉の決定と、施術のドーゼの度合いが決められる。

注 イ．病を「虚実」の用語では表現しないようにしている。鍼灸治療においては、「経脈体制」「ツボ」「体表」から「補・瀉・泄・除」や「温熱・寒冷」の施術を行なう事によって治療するのであり、体格の虚実よりも、はるかに大きな意味合いで、病気の「大過・不及」の方が施術の手技・手法の選択に関係する。従って、体質の虚実に関連させすぎて「逆治」「誤治」を冒さないようにすることが重要である。その為には、病態・病状の認識を表現する場合に、「多義的に用いられて・用語座標に移動が多い語」の使用を避けたい。故に「大過」→瀉法・「不及」→補法・「鬱」→除法・泄法・「満」→泄法に対応した用語法にしたい。

- ロ. 「満」は『九鍼論』関係の「大鍼」に関連して、しばしば記述されている概念であるが、その脈状も「浮而濇」「大而濇」「滑而大濇」のように記述されている。故に「水腫」の記述と極めて深い関連をもっている事が分かる。「浮腫」「慢性腫脹」などの状態を示しているので、この含みで「満」と表現したものと解釈する。

ステップ 5

病位の把握

- イ. 病んでいる五臓の把握から変動経の把握へ
ロ. 五体・衛気栄血・三焦・三陰三陽などの把握から関連性の高い経脈における反応表現の確認へ
ハ. さらに、治療配穴の設定と、選穴へと進む。次の段階は具体的な取穴に進む。